

寝ている間に仕事が進む！？

先日、友人から質問を受けました。「ホームページに英語とスペイン語があるけれど、どうやって翻訳とチェックをしているんだい？」

二つの外国語のページは、そのいきさつがあって掲載しているものですが、この機会に翻訳とチェックの舞台裏について紹介しておきたいと思います。

それは、自分の人生経歴から来ています。英語は高校のころから好きだったので、それなりに一生懸命に勉強しました。でも大学を出て、NHK 学園高校の教師をしていたときは、担当教科が簿記だったので外国語とは無縁の生活。その後、聖教新聞に入社して間もなく、スペイン語の必要性が生じてきて自発的に勉強を始めました。ゼロからの出発。当時 34 歳でした。でも結果的に、このことが機縁となり、パナマ特派員としてラテン・アメリカを 10 年間にわたり駆け巡ることになったのです。定年後は、もう一度キチンと系統立ててと、スペインのマラガ大学に留学したのです。

一方、英語は職場で日常的にも必要だったので、不断の研鑽を続けました。特に 50 代に入って、住んでいる昭島市の隣りにある米軍横田基地の仏教徒（SGI メンバー）の世話をする立場になってからは再び勉強。時間の自由になった定年後は、基地内のセントラル・テキサス・カレッジに入り、英語とアメリカ文化を勉強したのです。



こうして両言語でインタビューやメールの交信もなんとかできるまでになったのです。

(詳しくは「私の語学習得体験」をご覧ください)

2 年前、このホームページを立ち上げました。すると、知り合いの外国人の友人から、「自分たちも書かれているものを読みたい」との希望が寄せられてきたのです。そこで、それぞれの言語圏や文化にも共通し、興味深く読まれそうなテーマに絞って自分で翻訳を始めた次第です。

とはいえ、翻訳に完全な自信があるわけではなく、第三者のチェックが必要です。そしてチェックはネイティブ(その言語を母国語とする人)が理想なのです。私も日本国内に多くの外国人の友人がいますが、それぞれ忙しい立場にありチェックを頼むのには気が引けます。プロに頼めば相当額のチェック料金を取られるでしょう。

そうこうしているなか、なんと「記事を読みたい」と言った海外の友人自身が翻訳のチェックを申し出てくれたのです。英語はアメリカに住む K さん、スペイン語はパナマに住む M さんでした。K さんは横田基地で知り合った元米軍将校、M さんは私がパナマ特派員だった当時の友人で、元獣医で現在はパナマ SGI の機関誌の編集に携わっています。

彼らの申し出に心から感謝しているところですが、これをもう一歩広げて考えていくと、

アメリカでもパナマでも、そこに住んでいる人はいわば誰でもが、つまり 100 パーセント近くがネイティブであるというわけです。



こうして、翻訳した原稿をその日の夜、メールに添付して送っておくと、時差の関係で向こうは昼間、早いときには翌朝には私のパソコンにチェックされた原稿が戻っています。こちらが寝ている間に仕事は進んでいるのです。

「フラット化する世界」(トーマス・フリードマン著)がベストセラーになっています。そこでは、パソコンによる仕事が、インターネットを使いアメリカからインドへ、インドからイギリスへ、そしてまたイギリスからアメリカへと地球の昼時間を追っかけて進んでいる、つまりそれぞれの国の人々は仕事が終わって眠っていても、リレーされたその作業は 24 時間どこかの国で続いていると述べています。

30 年前、私が特派員としてパナマに赴任したころは、メールはおろかファクスさえもありませんでした。日本語もローマ字で打ちながらのテレックスによる交信でした。すごい時代に入ったものですね！

私もそんな利便さを活用し、翻訳チェックのほかにも、今、メキシコの旅行会社の雑誌に毎月レポートを連載しています(「エッセイ・コラム」のページの「旅たび東洋」)。

「へエ、こんなこともできるんだ！」と、66 歳になったドン・キホーテも、独り言ならぬ深い感銘と驚きを抱いているところです。